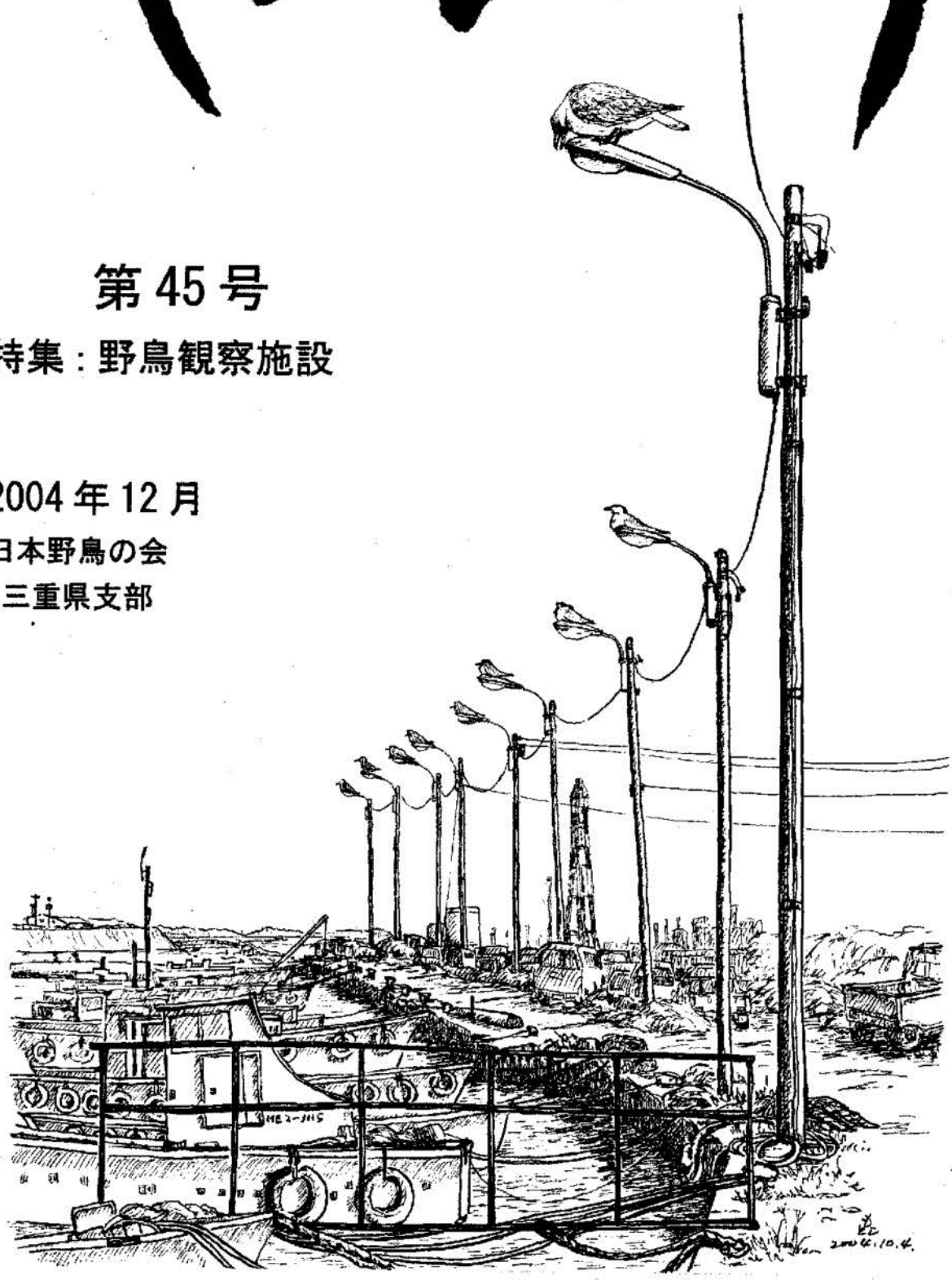
しろちどり

第45号

特集：野鳥観察施設

2004年12月

日本野鳥の会
三重県支部



人が連想する川とは

支部長　杉浦邦彦

前号の「川」特集をみると川への関心の大きなことを知りました。そこで川とは一体どんなものだろうか。ちょっと真面目に考えてみました。理由は、川について議論していると、どうしても噛み合わないことがよくあるからです。

そこで、二十年前の出来事をおもいだしたのです。

伊勢神宮の御遷宮で新しい木の香の漂う宇治橋の中央で、私が秋の渡りのサシバをカウントしていたときでした。昼下がりで上空のサシバの移動が落ち着きかけたときのことです。大声で、四人の中年男子が五十鈴川の川面を橋の上から眺めながら議論していたのです。その内容は五十鈴川が「川」であるのか、そうでないのかというものです。勿論、結論は統一することなく引きあげて行ったのです。議論は次のようでした。

1）　昔（記憶として）は、「狭い川巾で、護岸には乱杭が不規則に並び、一部に破損部があって、そこはえぐり取られないように転石が投げ込まれ、転々とネコヤナギやヨシと思われるような禾本科の草が元気よく茂っていた。斜面には、確かシイかムクノキなのか、大木が生え、それが太陽の光を受けるために水面上へ太い枝を張り出し、水面を覆っていた。」が今は川巾が広

目　　次

巻頭エッセイ・表紙の言葉----------2
特集：野鳥観察施設
特集にあたって----------4
ウトナイ湖----------4
我孫子市鳥の博物館----------5
軽井沢野鳥の森探鳥記----------5
味の素東海バードサンクチュアリを訪ねて----------6
大阪南港野鳥園----------7
琵琶湖水鳥・湿地センター探鳥記----------8
弥富野鳥園----------9
藤前干潟に建設される施設----------9
雲出川河口野鳥観察舎にて----------11
野鳥観察施設データ一覧----------12
アートギャラリー----------13
会員のページ
アカエリヒレアシシギとの二度の出会い--14
孔島のウチヤマセンニュウ----------14
嗚呼ヒヨドリ----------15
野鳥情報----------16
今日も鳥日和----------17
調査研究のページ
安濃ダムと横山池のカモ類----------18
支部活動のページ----------20
探鳥会報告----------22
編集後記----------24

アオジ

表紙の言葉

鹿島素子

港を照らす高い電灯が点ったところはまだ見たことがないが、港に入ってくる船がずっと遠くても、ここにいれば早くから見極められるだろう。獲ってきた魚が荷揚げされる時にこぼれ落ちる小魚を頂戴するためには、ここは見張り台として超一等席であり、安心して休憩できる指定席である。

くなりそれを見つけられなくなりました。

2） 昔（記憶として）は、「上流、下流部ともに川巾が倍近く広くなった感じがしている。」でも宇治橋の大きさは変わっていないという説明でした。「なんでも川の流れは蛇行し、中央部にはちょっとした三角州になった砂州があった。」それがなくなり水面は淀んでいます。「川底は自然の転石があって、せせらぎの音が心地よく、転石の凹みにはサツキやアワモリショウマやコケが生えていた。」ところが今は、大小の石張りで張りめぐらされ、護岸も大きな石垣ではなかったように思います。これでは、いま話題となっているコンクリートの三面張りと一緒だね。

3） 昔（記憶として）は、「流れの中にヒゴイではなく、20～30ｃｍのウグイかな、とかイシガメやモクズガニの歩いていた姿をみた。」が、いまは、ヒゴイがたまに姿を見せるだけです。

4） 川であれば川底が黒く、ヘドロだらけで、水質も墨のように黒いのが「川」ではないかと思います。

これが議論の要旨でした。

私たちの概念は一般的に「川」「河」「渓流」を「川」と総稱して表現することが多いように私は思います。川の自然環境のことを議論していると、いつも微妙に食い違いを感ずることがよくあります。

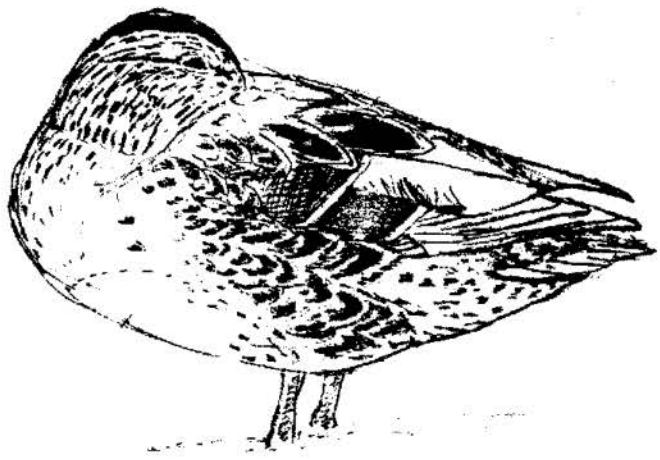
そこで、総称の「川」を整理してみると次のようになります。どの辞書にも川とは、「地表の水が集まって流れる水路。」とあり、「川」の字は象形文字であり、両端は川岸、中央は水を表現しています。「河」は、中国の黄河を指し、固有名詞で、いつのまにか日本では大川を「河」又は、運河には「河」、人工によって開いた水路を「河」と表現するようになったが、川と河は、漠然と表現しあまり区別を明確にはしていないと思われます。従って渓流についても、微妙な環境になると、「川」「河」と同様に曖昧なところがでてくるようです。「森の文化」を持つ民族性の感覚が面白いですね。

日本の河川は、大陸地形と違い、列島の中央に急峻な山々があり、河川の大部分は急勾配で延長が短いために、地上に降った雨水は一挙に海に流れ出るため、洪水時は急に増水し渇水時は干上がり、洪水と渇水が顕著です。この現象が天候で読めないと、気象予報で注意を呼びかけても人身事故の発生につながってしまいます。

さて、洪水によって雨水が氾濫したとき、これを防除するには、蛇行した水路を直線化し、早く上流部の水を海へ流してしまえばよいということで、近代国家になってから欧州の文化をとり入れた日本では、それを手本に河川法ができ、幾度となく改正されて複雑になっています。それに加えてもう一つ国有財産となっていて河川法では扱われないものもあり、法務局に備えられている「公図」のなかに青線で示されている水路や水田の中を走っている水路等も河川の一つです。勿論、私有地内に個人が所有する水路（河川）もあって、「川」はたいへん複雑です。これらをよく理解したうえで野鳥が生息できる環境つくりをしようではありませんか。日本では鳥が比較的安全に山から海に連続して生息できる環境は河川にしか残っていないのではと考えるこのごろです。

宇治橋上での議論の中で、幼少時代に育まれた周りの環境がいかに大切か思い知らされました。現在みる若者の環境が本当の日本の河川の環境だと思ってしまったとき、彼らが大人になってからの判断が、幼少時代のものであるのが当然だと感違いをされたときを想像すると背筋に震えを感じ止むことがありません。

マガモ



特集：野鳥観察施設にあたって

木枯らしの吹く季節でも野山を歩き回って鳥を見るのは野鳥の会会員の本領とするところです。しかし、たまには暖かい部屋の中からじっくり鳥を観察するのもよいものです。今回は近県の野鳥観察施設を紹介します。支部会員による紹介記事と施設の情報を掲載します。藤前干潟の施設については現在建設中で、概要と問題点を名古屋鳥類調査会の森井さんに書いていただきました。ちょっと遠いのですが、北海道のウトナイ湖については松島さんに書いていただきました。近県の観察施設で評価の高い片野鴨池については残念ながら、紹介記事を書いていたでける支部会員を見つけだすことができませんでしたが、一見に値する施設です。残念ながら三重県には公立の野鳥観察施設がありません。そこで小坂さんに一文書いていただきました。

さあ冬鳥たちが集合する季節です。　今度はすこし足を伸ばしてあこがれの鳥を見に行きませんか？

編集部

ウトナイ湖

北海道苫小牧市　松島雅之

私が初めてウトナイ湖を訪れたのは二年前の６月末の事でした。転勤により三重県から赴任し、それ以来今日まで苫小牧の住民として暮らしています。

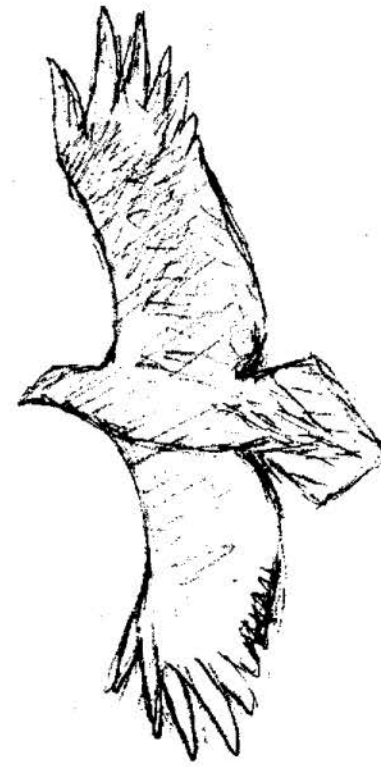
『ウトナイ湖』野鳥を趣味とされる方でこの名前を知らない人はほとんどいないのではないでしょうか。日本野鳥の会が国内で最初にサンクチュアリに指定をした所であり、ラムサール条約の登録湿地でも有ります。まさに北海道随一の探鳥地と言うにふさわしい場所と言えるでしょう。

ここは水鳥の渡りの中継地として有名ですが、周りの環境から山の鳥、特に草原の鳥が多く過去に250種以上が確認されており、季節によっては一日で60種以上の観察が出来る事も稀ではありません。そんな場所で私のお勧めは湖の北側に在るネイチャーセンターからシマアオジの小径・イソシギの小径を経て湖岸の観察小屋に至るコースです。

歩き始めの森林帯ではカラ・ゲラをはじめ、夏にはクロツグミ・アカハラ・キビタキ・センダイムシクイが出迎えてくれ、続く草原地帯にはノビタキ・コヨシキリ・ノゴマ・ベニマシコ等かなりにぎやかなメンバーが勢ぞろい、上空にはオオジシギがけたたましい羽音を立てて飛び回っています。更に進むと突然ウトナイ湖の岸辺に立つ事になります。夏季はコブハクチョウが子連れで泳いでいる程度ですが、冬季は川の流入口を除きほとんどが白一色に氷結してしまい、氷の上には沢山のマガンを中心とした水鳥が羽を休め、上空をオジロワシが飛ぶ度にそれらの水鳥達が一斉に飛び立つ様は圧巻です。

ウトナイ湖を訪れるバーダーのほとんどはこのコースの終点「岸辺の観察小屋」だけを目指してやって来るようです。目的はシマアオジ、でも最近はめっきり数が減ったようで本州からわざわざやって来ても会わずに帰られる方が多いのではないでしょうか。

そんなウトナイ湖でお勧め季節はと言うと絶対５月から６月中旬まで、それを過ぎると休日でもほとんど同好の士に出会う事も無くひっそりと静まり返ってしまいます。



オジロワシ

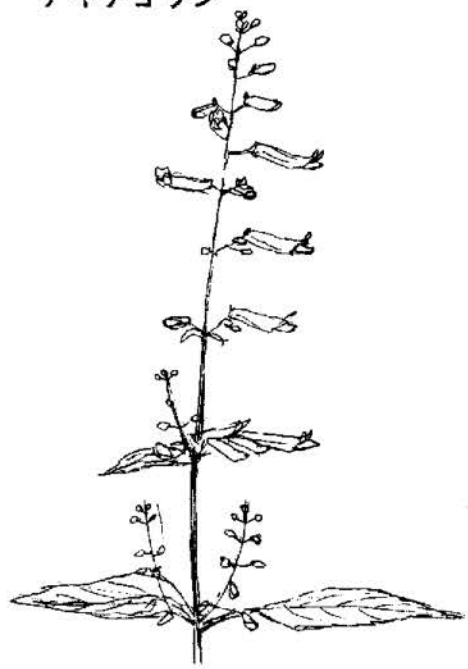
我孫子市鳥の博物館

安芸郡安濃町　平井正志

千葉県利根川下流の手賀沼のほとりに鳥の博物館がある。山階鳥類研究所の所蔵する鳥の様々な剥製標本を展示している。以前、仕事の関係で常磐線に乗る時が多く、帰りにしばしば訪れた。入口ではオオバンの剥製が迎えてくれる。トキの剥製標本を見るのはやはり悲しい。日本の宝をひとつ失ってしまった。 コウライアイサ♂の剥製はみごとのひとことに尽きる。あのうろこ模様に、30cmくらいまで近寄って見ることができる。実に繊細である。その他、世界の鳥の常設展示がある。期間を区切ってテーマ展示もある。10年くらい前だったか、鴨の展示はおもしろかった。翼をひろげた鴨が展示してある。ふだんはゆっくりと見ることのできない翼鏡(次列風切羽の金属光沢をもつ部分)の詳細を心ゆくまで見ることができた。 剥製標本を手に持ってひっくり返して見たいと思うのは私だけであろうか？骨格標本があるのもおもしろい、鳥とほ乳類がどう違っているのかが、よく分かる。鳥好きが高じた人はぜひ見に行くべきである。きっとドブにはまるように鳥の世界にはまってしまい、出ることができなくなる。しかし、博物館にはちゃんと出口があるので心配無用。

常磐線　我孫子（あびこ）駅からバスにのり、市役所前で降りて10分程歩く。天候がわるければタクシーがよいであろう。博物館の裏手、林の中には山階鳥類研究所がある。

アキチョウジ



軽井沢野鳥の森探鳥記

津市　橋本富三

中軽井沢駅からまっすぐ北へ、約２ｋｍ、星野温泉ホテルの近くに軽井沢野鳥の森がある。日本の大探鳥地の一つといわれており、野鳥の森の遊歩道入り口で、日本野鳥の会創始者、中西悟堂の胸像が迎えてくれる。

ここは２度目の訪問である。初めての訪れた時は、泣く子は黙るがおばさんは黙らないといわれる、はまちどり会の面々による雨の中の訪問となり、ゴジュウカラ１羽しか会えなかったという情けなくも悔しい思い出がある。お暇な御仁は、その顛末が、しろちどり40号のボーボー日記パート２に詳しいのでご覧いただきたい。ただ「わざわざ読んでやったが、ちっとも詳しくなんかない、あほらしい、時間の無駄だった。」等とお怒りにならないよう前もってお断りしておく。

今回は雨男、雨女がいなかったので、６月の梅雨時期というのに、晴天の中での探鳥になった。遊歩道はせせらぎに沿った小道や雑木林に覆われた気持ちの良い小道で２～３時間位で一回り出来る。途中に休息用の東屋もあり、弁当を使うことも出来る。私達の探鳥ではゴジュウカラ、ヤマガラ、コガラ、シジュウカラのカラ類が見られ、高く空を飛ぶサンショウクイの鳴き声をはじめて聴いたのが印象的だったのを覚えている。また、東屋付近でコガラの風切羽がまとまって落ちていた。何かの事故にあったのだろうか。フィールドノートを付けていない上、極度の健忘症のためそれ以上は覚えておらず大変申し訳ない。但し、手入れも行き届いており、ゴミなどは全く落ちていない事に感心した。

探鳥を終わって元来た道を引き返すと、左手にログハウス風の瀟洒な建物があり、看板にピッキオと書かれている。中に入ると、この森で見られる動植物の写真や、絵による解説が手作りで作

られている。また建物近くの木立にある、人工のムササビの巣には、小型カメラが据え付けられ、ピッキオの建物内のテレビに巣の中の様子が映し出されていた。ムササビは普通２～３個の巣を持っており、それらを日によって渡り歩くそうでその時、巣は空っぽであった。「さすがは軽井沢。ムササビですら、ちゃんと別荘を持っている！」と感心するボーボーに、呆れ顔でムササビの説明をしてくれた笑顔の素敵な斎藤さんありがとう。おかげで、鳥のおもしろ私生活（ピッキオ編著）なる図鑑をまた１冊買うことになってしまった。

ここには野鳥の森を案内してくれるプロのガイドがおり、自然大好き人間には楽しい情報が得られるので是非利用すると良い。

味の素東海バードサンクチュアリを訪ねて

津市　西浦克征

四日市コンビナート地帯の一角に、ひと時の静寂が訪れます。国道のすぐ近くにあるとは思えない「別世界」の観があります。

味の素㈱東海事業所は近鉄海山道（みやまど）駅から西へ10分ほどの国道23号線近くにあり、名古屋ドーム６個分ほどの広さがあります。1962年に操業が開始され、主に調味料、甘味料や医薬品関連商品などが生産されているそうです。

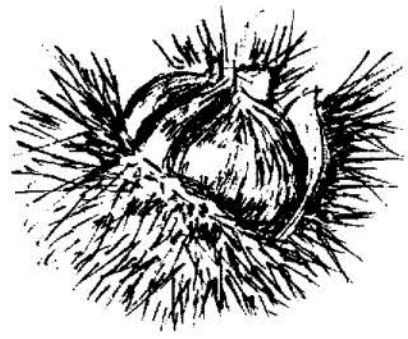
今回訪ねたバードサンクチュアリは、工場敷地の北東部で国道23号線と県道に挟まれた角地にあり、広さは13000㎡ほど。以前は従業員の昼休みの散歩など憩いの場として利用されていましたが、一人の社員のチョウトンボの観察からバードサンクチュアリ設定の提案へとつながり、2002年から立ち入りを制限して社員のボランティア活動を主体にサンクチュアリ化が進められました。今までに約1000人の見学者が訪れているそうです。

駐車場から正門受付を通り抜け300ｍほどのところに観察小屋があります。小屋には資料類のほか双眼鏡などの観察器具も設置されています。正面窓の中央部には天然の池が広がり、その周りには樹齢40年近いクスノキなどの木々が茂り外界と隔てられており、水面にはスイレンの葉が浮かび、周囲の半分ほどはアシなどの水草でおおわれています。６月初旬にも一度訪ねたことがありますが、この時にはスイレンの花が咲きみだれ、あたかもモネの絵の一コマを思い出させる光景でした。葉の上をハクセキレイが足早に歩き廻り、正面奥の木々の間ではアオサギの子育ての様子ものぞき見できました。

今回訪ねたときには時期的なこともあって、正面奥にアオサギが数羽見られる程度でしたが、小屋に常設されている写真やパネルで今までに確認された鳥などの説明をしていただきました。サギ類はササゴイやチュウサギなど７種類、初冬からはカモ類も８種類程度が飛来し、それを狙ってハヤブサもやって来るそうです。年間を通して約50種が確認されているようです。野鳥だけでなくトンボやチョウなども多く、ラセンイなどの植物も見られ豊かな生物環境となっています。

こんな身近なところに鳥たちの安息の場があることを目にして、関係者の理解と努力があれば、我々の近くにもこのような場所を増やしていけるのではと思いながら工場を後にしました。

なお、味の素のHP上で、ライブカメラによるバードサンクチュアリの様子が常時放映されているので、一度見ていただきたいと思います。（味の素ＫＫ→企業情報→ライブカメラ→バードサンクチュアリ）（20名以上の団体は要予約）



クリの実

大阪南港野鳥園

度会郡度会町　小坂里香

「住之江の岸による波」、「難波潟短き葦の節の間」と、かの百人一首にも登場しているように、大阪湾沿岸はその昔、広大な湿地が広がる自然海岸でした。どんなに多くの野鳥が渡りの中継地として、越冬地として、また繁殖地として利用していたことでしょう。その頃の夢のような情景を現代のコンクリートジャングルと化した南港界隈から想像するのはかなり無理がありますが、その南港の一角、南港野鳥園を訪れてみれば、80年代に整備された人工的環境とはいえ、かすかに往時の面影をしのばせる風景が見られます。

まず、行き方ですが、車なら西名阪松原ジャンクション経由で都市高速を使い、環状線から湾岸線に入って、「南港北」で降りるといいでしょう。そこから少しもどるような形で海の方に走り、約10分ほどで到着です。電車利用の場合は、難波から地下鉄四つ橋線に乗り、住之江公園からニュートラムに乗り換えてトレードセンター前駅から徒歩になります。この徒歩はけっこう長いので、暑い時期寒い時期は、つらいかもしれません。（中ふ頭駅から自転車の無料貸し出しもあるようです。）

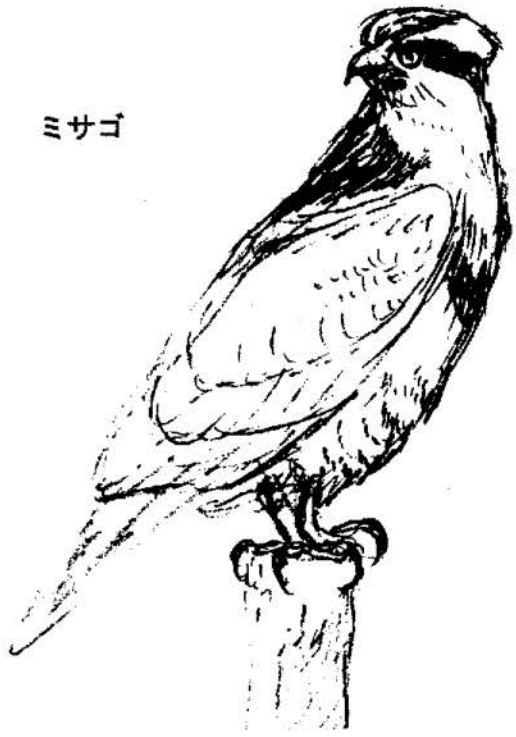
着いたらまず、展望塔に行って、公園全体を把握しましょう。窓からは大阪湾をバックに、葦原にかこまれた池が見渡せます。季節と潮時がよければ干潟が広がり、シギやチドリの仲間がたくさん見られるかもしれません。昨年９月に訪れたときは、潮位が高かった関係か、鳥影が少なかったとはいえ、アオアシシギ、コアオアシシギなどのほか、チュウヒやミサゴが長く飛んで、楽しませてくれました。

鳥の姿があまり見られなかったら、常設展示で干潟や野鳥のお勉強も。見応えがあるのはバードカービングで、北海道の北尾久美子さんの作品です。また、トラフズクのペリットの内容が展示してあり、ネズミの骨などはっきりわかって面白いものでした。

南港野鳥園は2004年にシギチドリネットワークの32番目の登録地になっており、ボランティアの活動など、登録の経緯もパネルで展示してありました。その他、干潟の仕組みや生き物の解説など、ためになる展示がいっぱい。（鳥を見なくても、十分楽しめる？）

光線の加減にもよりますが、園内を歩いていくと、南池、北池から近い場所１カ所ずつ、観察小屋もありますので、そこからも観察できます。が、園内を歩く楽しみは、木立の中で冬場は越冬中の鳥たち、春秋は渡り途中の小鳥を見つけることに尽きるでしょう。はばたきの丘、さえずりの丘といった楽しい名前の広場を目指して歩くと、９月に行ったときにはコサメビタキなど、冬に訪れた時はトラフズクを見ることができました。

南港野鳥園では、野鳥の会大阪支部による探鳥会も毎月行われており、それに参加するのもよいかもしれません。環境教育のフィールドとしても、活発に利用されているようです。
まさに都会の中のオアシスという感じですが、開発の波の中で声をあげてこの場所を守り、大事にしてこられた人たちがいたからこそ、残された自然だということを忘れてはいけないと思います。



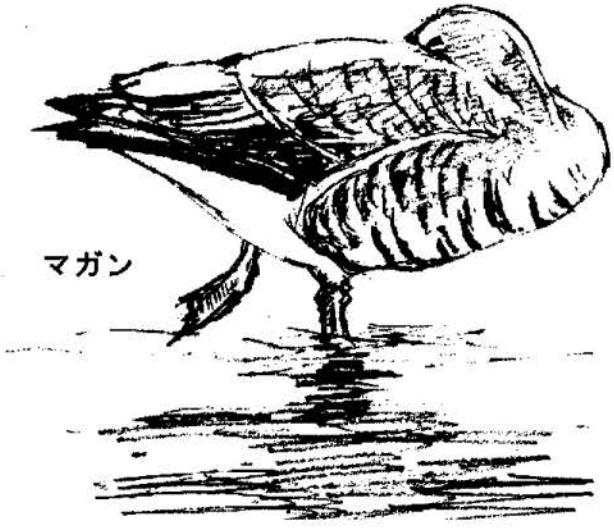
ミサゴ

琵琶湖水鳥・湿地センター探鳥記

津市　橋本富三

琵琶湖の北部を一般に奥琵琶湖と呼び、本来の琵琶湖らしい自然の風景が広がっている。その一角、尾上温泉の近くに琵琶湖水鳥・湿地センター(以下水鳥センターと略)がある。このあたり、冬の奥琵琶湖の代表はコハクチョウである。そして、マガン、ヒシクイの群、そのほかにカモ類、サギ類、カイツブリ類は言うまでもない。さらにオオワシまで出る。

私が初めてオオワシを見たのはこの琵琶湖であった。奥琵琶湖の東岸からさらに東の方に山本山という小高い山があり、その中腹の赤松にそのオオワシは止まっていた。毎年11月頃、同じ個体が遠い北国から飛来するのだという。一度だけそのオオワシが琵琶湖へ魚を獲りに行くのを見た。フンをしたかと思うと赤松の枝を蹴って、こちらの方へ飛んでくる。頭上に来ると、でかい！の一言。白い肩、大きく目立つ黄色いくちばし、がっちりとした脚。鳥の王者の貫禄は十分だ。こちらは口をあけてポカンと見とれてしまうしかない。そのまま琵琶湖へ滑空したと思うと10分位後に魚を鷲掴みして、またもとの赤松の枝にとまり、餌の魚をむしりだした。すると横に止まっていたカラスがちょっかいを出したとたん、せっかくとってきた魚をポロリと落とした。すかさずカラスが魚を横取りしていく。王者たるオオワシもカラスにはかなわない。



マガン

スズガモ

しかしこのオオワシも2000年の1月に死んでしまった。湖北水鳥センターにその羽が飾られていると聞く。もう戻る事のない遠い北国の夢でも見ているのだろうか。

オオワシを堪能し、琵琶湖に戻って水面を見る。なんとコハクチョウがいない。一羽もいない。コハクチョウ＝冬の琵琶湖の定理は間違っているのか？　水鳥センターで尋ねると、昼間のコハクチョウ＝周囲の田圃＝えさ探し、夜間のコハクチョウ＝琵琶湖＝夜のねぐらの定理が正しいのだという。それでは田圃を見に行くしか有るまい。教えられた田圃には百羽程度のコハクチョウがいた。しかし、餌をさがして田圃を、どたどた歩くコハクチョウにデリカシーもロマンも無い。一瞥して早々に引き上げた。ボーボーの格言「花は野に、白鳥は琵琶湖に」。

夏にも一度奥琵琶湖を訪れたことがある。琵琶湖名物のエリ漁を前景に比良山系に沈む夕日は格別美しい。このときは無数のカイツブリのリュリュリュリューという鳴き声のみであったが、そのもの悲しい鳴き声は今も忘れられない。冬鳥がいなくても、奥琵琶湖には旅情があふれている。

水鳥センターから東方に約10ｋｍの西池も訪れたい。ここでは最近人工の島がつくられ、そこで羽を休めるヒシクイが真近で見られる。他に餌付けされたオナガガモとコガモたち。時にエジプトガンもでる？

弥富野鳥園

日本野鳥の会愛知県支部副支部長　加藤倫教

弥富野鳥園ができて約25年。広大な干潟が潰されてシギやチドリの楽園はなくなってしまいましたが、いま野鳥園は山野の鳥にとって重要な場所になりつつあります。

設立時に植えられたクスなどさまざまな樹木の樹林帯が約30年の月日を経て、立派な森になりました。

野鳥園では定期的に標識調査を行なっていますが、野鳥園のこの樹林帯が渡りの重要な中継地になっていることが分かってきました。

探鳥会では余り観察例のないクロジが多数この森を通っています。

ほかにもルリビタキ、トラツグミ、シロハラ、ツグミ、オオルリ、エゾビタキなどが多数この森を渡りの途中立ち寄っています。

野鳥園での野鳥観察は、秋から春先までが一番よいでしょう。カモ類は、マガモ、オナガガモ、コガモ、キンクロハジロ、ホシハジロなどが多く、珍しいものは余り期待できませんが、4月にはシマアジを見られることもあります。

冬の見ものは、タカ類です。チュウヒ、ノスリ、ミサゴ、トビは確実に見られますし、運がよければオオタカやハイタカ、ハイイロチュウヒなども見られるかもしれません。

バーダーに人気の高いセイタカシギも春や秋に見られることがあります。

最近カラスと並んで「悪者」扱いされがちなカワウ、野鳥園はいま全国屈指のカワウの繁殖地でもあります。総数約1万羽ともいわれる朝夕の群れでの移動は壮観です。次から次へと途切れることなくカワウが行き来します。

野鳥園の森は、カワウ以外にも多数のアオサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギの繁殖地になっており、繁殖期には間近にその様子を観察することができます。

[野鳥園への交通]

野鳥園に向かう公共交通機関はありません。三重方面からは、伊勢湾岸道弥富ＩＣを降りてすぐです。２３号線を利用の場合、「稲荷西」交差点を右折、湾岸道下の交差点を左折してすぐです。

藤前干潟に建設される施設

名古屋鳥類調査会　　森井　豊久

伊勢湾最奥部の藤前干潟。名古屋市はゴミ埋立処分場としての利用を断念。これをゴミ減量、循環型社会の出発点としました。干潟そのものの重要性はもちろん、訪れる市民に楽しみながら考える場として強く印象づけました。

環境省は、この地に鳥獣保護区770ｈａ、特別鳥獣保護区323ｈａを設け、その内特別鳥獣保護区が、2002年11月ラムサール条約登録湿地として国際的に認められました。記念のプレート、登録証のレプリカが名古屋市の「野鳥観察館」と環境省「稲永ビジターセンター（仮称）」の間に設置されています。

建設中の２箇所の施設概要は次のとおりです。

「藤前干潟活動センター（仮称）」

３階建　（建築面積）　557.8 ㎡

主要諸室　：　展示ホール、レクチャー室（実験室）、展望室（望遠鏡による野鳥観察）

園　　地　：　レクチャー広場、足洗い場、駐車場、車屋（2）

交　　通　：　名鉄バスセンター「名古屋駅」より「長島温泉行き」に乗車し「南陽町藤前」下車、藤前公園にそって南へ15分。

所在地　：　港区藤前２丁目202

「稲永ビジターセンター（仮称）」

２階建 835.7 ㎡

主要諸室　：　展示室、レクチャー室、研究学習室、ライブラリー（野鳥観察用の望遠鏡は、隣接する名古屋市「野鳥観察館」の30台が利用できるので設置しない）

交　　通　：　鉄道

10月６日開通したばかりの名古屋臨海高速鉄道あおなみ線。（名古屋駅の新幹線と関西線の間のホーム）野跡駅下車、徒歩10分。（現在は直線道路完成前で１５分所要）

市バス

幹築地１号系統（野跡駅行き、フェリー埠頭行き）

金山25号系統（野跡駅行き）

徒歩１０分

所在地　：　港区野跡４丁目９（稲永公園内）

解決されるべき諸問題

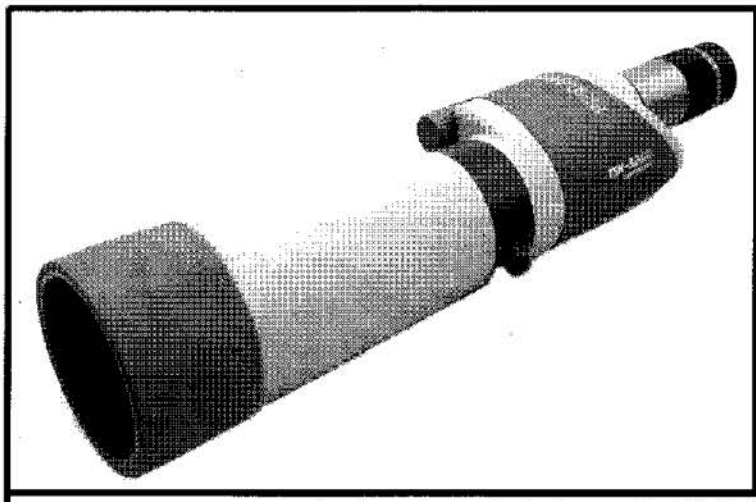
１）藤前干潟活動センター（仮称）が常時利用できない。人件費等人手の問題が未解決で市、県、市民ボランティア等の協力体制に望みを託している現状。

２）稲永ビジターセンター（仮称）は、鉄道あおなみ線や市バス等、交通の便は至れりつくせりだが、藤前は本数の少ないバスのみ。

３）藤前地区と稲永地区との行き来は自家用車のみ。徒歩では健脚で４０分～５０分かかる。

４）今年になって小学校の総合学習や野外活動等で「藤前干潟」、「南陽工場（ゴミ焼却場）の見学、「野鳥観察館」での野鳥観察など頻繁に３年生～５年生が訪れ、一度に100人を超えることもしばしば。これからは施設を振り分けての利用も可能だが、野鳥や底生生物等の説明員の確保、養成が最大のネックとなっている。

ハジロカイツブリ



取扱商品

フィールドスコープ
双眼鏡（小型・大型）
天体望遠鏡
カメラ（新品・中古）
その他光学製品各種

取扱メーカー

KOWA・NIKON・FUJINON
MIYAUCHI・VIXEN・PENTAX他

中部地区最大の光学製品専門店

TELESCOPE CENTER EYEBELL

テレスコープセンターアイベル（株式会社アイベル）

〒514-0801 津市船頭町3412（メガネのマスダ2F） TEL 059-228-4119

定休日／毎週水曜日　営業時間／10:00～19:00

ホームページ http://www.eyebell.com　メールアドレス eyebell@diamond. broba. cc

雲出川河口野鳥観察舎にて

小坂里香　（度会郡 度会町）

20XX年10月○日朝。少し寝坊してしまった。

今日は、「渡り鳥の会」の月例会と、年２回恒例の五主海岸清掃活動の日だ。日曜日なので、観察舎も来館者が多いかもしれない。秋のシギ・チドリの渡りはもう終盤で、数は減ったものの、まだまだ、干潟レストランは盛況だ。そろそろ、カモやカモメの仲間も増えてきて、海辺はかえって賑やかさを増している。

雲出川河口と五主海岸を見晴らす堤防下に、県営の野鳥観察舎ができて数年になる。１階は駐車場と野鳥のリハビリ施設、２階は研修室と事務所、図書室、３階が展望観察室と展示スペース。グループで数年かかって調査や写真展などを行い、県民と松阪市民に雲出川河口の渡り鳥保護の重要性を訴えてきた成果だ。新生松阪市の協力により、この地がシギ・チドリネットワークの登録湿地に認定されたことも、県を動かしたのだろう。

観察舎から歩いて数分の場所には、数ヘクタールの農地を借り受けて、観察舎のレンジャーと自主グループで共同管理するビオトープがある。そこでは、刈り取り後も秋から春にかけて水を張った無農薬米の栽培田やため池を造成し、水生昆虫や蜻蛉、蛙、は虫類、小型魚類、甲殻類などの住人たちに、住み心地のいい環境を提供している。もちろん、渡り鳥や、年中たくさんいるサギ類、カイツブリ、ケリなどにも大好評。たまに猛禽が現れて、食事中のお客さんをさらって行くこともあるが。

さらに湿地の周りには、あちこちにブラインド小屋が設置され、野鳥たちを驚かすことなく、観察したり、撮影したりできる。一角には、潮風に負けない樹種を選んで、小さな林も造成中だが、こちらは野鳥のオアシスになるには、もう少し時間がかかるだろう。

また、少し歩けば五主大池があり、ここは昔、何年もかかって銃猟全面禁止を勝ち取った思い入れのある場所だ。池の横にも駐車場があり、高床式の観察小屋があって、見やすい場所から数万ものカモたちをゆっくり観察できる。昔は、猟期に入るとカワウとカイツブリくらいしか見られなかったことを思うと、感慨深いものがある。

五主海岸は潮干狩りのメッカで、そこで生計をたてている人も数多くいらっしゃるため、その権利を守ることが、観察舎の建設の上で大きな問題となった。しかし、結果として、潮干狩り客は昔と変わらず野鳥たちと共存しており、潮干狩りのついでに観察舎に寄って、干潟の自然のことを学習していく人も多い。人間と野鳥の共生のよきモデルになっているといえるだろう。

私も歳をとって、体を使うのはきつくなったが、「渡り鳥の会」の活動は、ますます盛況になり、観察舎で野鳥観察の楽しみを知った子どもたちも、ぼつぼつ協力してくれるようになった。干潟の観察会、田んぼの作業活動兼観察会も定期的に行われており、田植えや稲刈りなど、若い人が率先して、みんなで楽しんで管理を行っている。

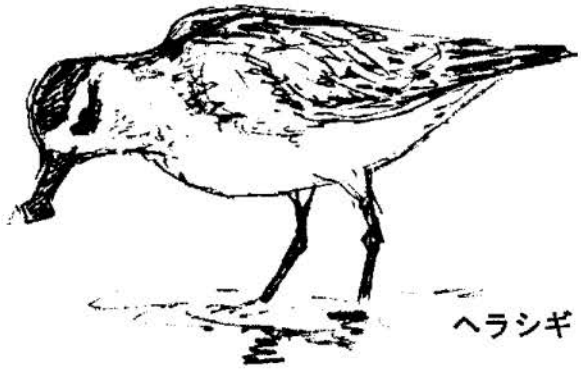
最近は、渡り鳥全体の個体数は相変わらず横ばいか、減少傾向が続いているものの、五主海岸一帯への飛来数は増えているのは喜ばしいことだ。

あれ？集合時間は９時だったはずだが、いつまでたっても、人が来ないのはどういうわけ？振り向くと、観察舎が消えてなくなっている。どういうことだろう？あれ？あれ…？

…うなされて目が覚めた。すべて、夢だったようだ。うまくいきすぎると思った。

三重県には現在、こんな夢のような場所はないのだ。このような施設を建設できるか否かは、すべてマンパワーにかかっている。願っているだけでは実現しない。

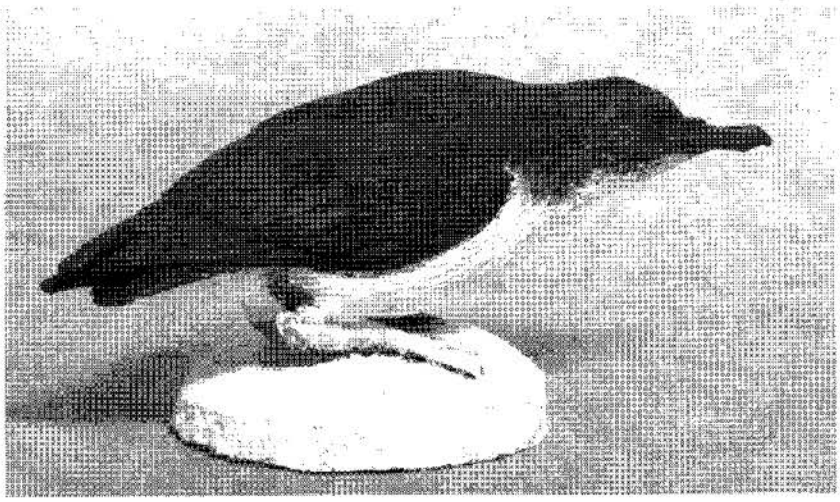
さあ、みなさん、どうしますか？



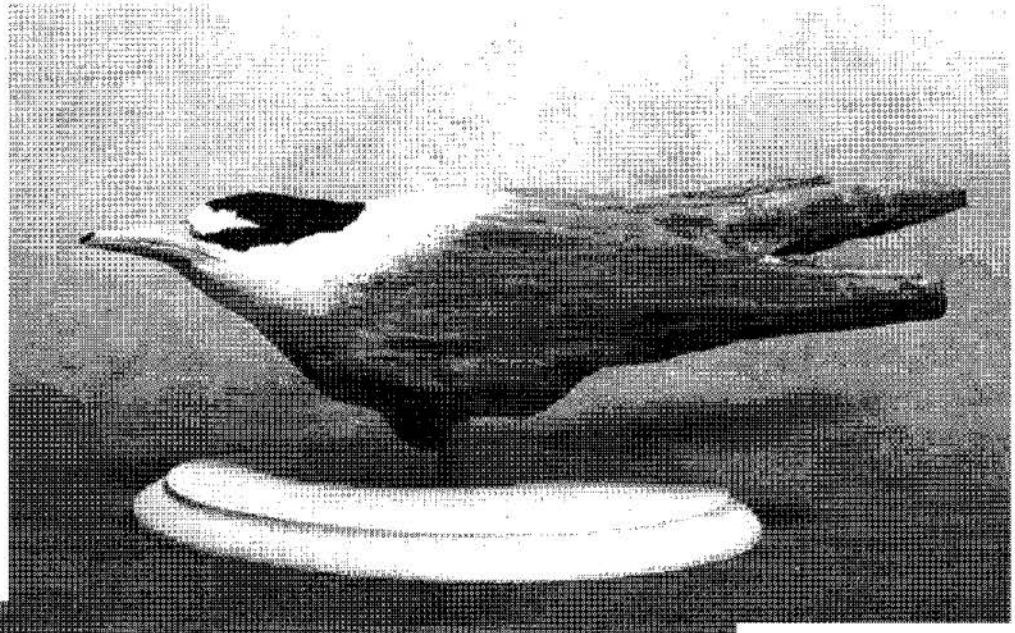
ヘラシギ

野鳥観察施設データ一覧

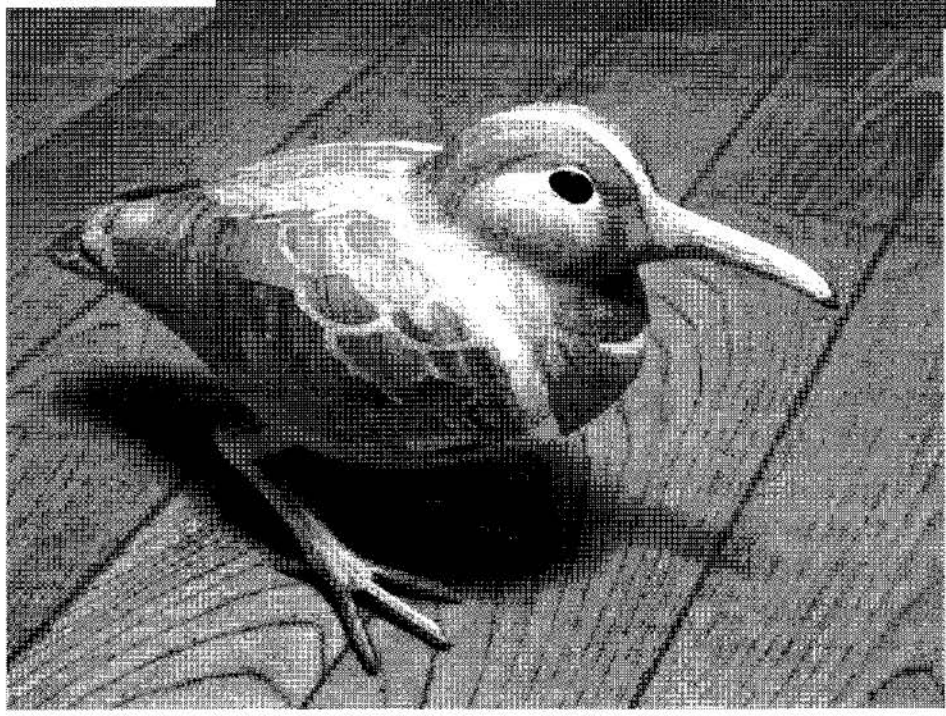
施設名	ワンポイント	観察できる主な野鳥	所在地	電話	ホームページ
春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンター	憧れの道東の自然が楽しめる。	シマアオジ・ノビタキ・ノゴマ・オジロワシ	北海道根室市東梅103	0153-25-3047	あり
ウトナイ湖ネイチャーセンター	日本野鳥の会最初のサンクチュアリ	ハクチョウ類・ガン類・オジロワシ・シマアオジ	北海道苫小牧市植苗150-3	0144-58-2231	あり
我孫子市鳥の博物館	手賀沼のほとりにある。山科鳥類研究所に併設	トキ・コウライアイサ♂（剥製）	千葉県我孫子市高野山234-3	04-7185-2212	あり
東京港野鳥公園	埋立地によみがえった自然を生かした野鳥公園。	シギ・チドリ類、カモ類、オオタカ	東京都大田区東海3－1	03-3799-5031	あり
軽井沢野鳥の森	プロのガイドによる野鳥の森ネーチャーウオッチング	キツツキ類、カラ類、カッコウ類、猛禽類	長野県軽井沢町星野	0267-45-7777	あり（ピッキオ）
舳倉島野鳥観察舎	日本海に浮かぶ渡り鳥の一大中継点	ヒタキ類、ツグミ類、シギ類、ウグイス類、猛禽類	輪島市舳倉島	なし	あり　（石川県）
片野鴨池観察館	網を投げてカモを捕獲する伝統的な坂網猟の猟場	マガン・トモエガモ・オオヒシクイ・猛禽類	石川県加賀市片野町子2-1	0761-72-2200	あり
琵琶湖水鳥・湿地センター	湖北の水鳥の楽園。	コハクチョウ・オオヒシクイ・カモ類	滋賀県東浅井郡湖北町今西	0749-79-8022	あり
弥富野鳥園	鍋田干拓地の一画にある野鳥園	シギ・チドリ類、サギ類、猛禽類	愛知県海部郡弥富町上野2-10	0567-68-2338	あり
味の素東海バードサンクチュアリ	コンビナートを潤す生き物たちの楽園	カラ類、サギ類、カモ類など約50種	三重県四日市市日永1730	0593-46-0111	あり（味の素）
大阪南港野鳥園	人工干潟と緑地で構成された都会のサンクチュアリ	シギ・チドリ類、カモ類、ヒタキ類、	大阪市住之江区南港北3-5-30	06-6613-5556	あり
米子水鳥公園	山陰地方最大のコハクチョウ越冬地。	コハクチョウ、マガン、ヒシクイ、カモ類、サギ類、オジロワシ	鳥取県米子市彦名新田665	0859-24-6139	あり
出水市ツル観察センター	世界でも有数のツル集団越冬地	ナベヅル・マナヅル・クロヅル	鹿児島県出水市荘2478-4	0996-85-5151	あり（出水市）
夢の野鳥サンクチュアリ	あなたのマイフィールド	見たいと願っている鳥全部	秘密	なし	なし



セグロミズナギドリ？：
第４４号で多田弘一氏からご紹介のあったミズナギドリを作ってみました。ミニチュア作品です。
粘土で原型を作り樹脂成型の手法を用いて２０羽ほど複製しましたが、全部旅立って行きました。



コアジサシ：
浜辺で拾った流木をコアジサシに見立てて、頭部のみ彫ったものです。



タマシギ：　オスの複雑な羽模様を木象嵌細工風に表現してみました。
本体は楠、羽模様は桂・朴、目は黒檀を埋め込みました。

嶋田春幸
（度会郡南島町）

アカエリヒレアシシギとの二度の出会い

三浦　悟（名古屋市）（三重県支部会員）

８月下旬に、愛知県から岐阜県にかけて２ヶ所でアカエリヒレアシシギを見かけたという話を聞いて出かけたのですが、いずれも空振りとさえませんでした。

９月９日の夕方、久居市内の水田を、あわよくばハリオシギでもとジシギ観察をしながら流していました。この日は私の誕生日なのでそろそろ帰らなければと思っていたところ（もう誕生日がおめでたい歳ではありませんが）、水をはった田圃にシギチが少し入っている所を見つけました。タカブシギやちょっと見かけないシギ（後からアカアシシギ幼鳥と分かったのですが）を観察していると、いきなり現れたのがアカエリヒレアシシギでした。小さい鳥がちょこまかと泳ぎ回っていて、なかなかかわいらしく、夢中になって撮影しましたが、夕暮れに逆光では、満足のいく成果はありませんでした。リベンジと翌朝にもう一度出かけましたが、限られた時間では前日と似たような結果でした。まあ、これは腕の問題もあるでしょうが。この個体は結局9月13日まで観察されていたそうです。

9月14日の午後、津の安濃川河口でトウネンの群を見かけ、ひょっとしてヘラシギあたりが混じっていないかなと観察していました。潮が引いてきて、干潟が狭くなり、いい感じと横の方に目をやると、そこにアカエリヒレアシシギがいるではありませんか。少し距離が遠く、デジスコでも何とか証拠レベルの写真しか撮影できませんでした。ほどなく上流へ飛んでいってしまい、じっくりと見られなかったのは少し残念でした。たまたまの通りがかりの個体かなとも思いましたが、翌日にも見られていたようです。
2回ともまったくの偶然、狙っての観察ではありませんでしたし、無欲がよかったのでしょうか。

アカエリヒレアシシギは、珍鳥とまではいかなくても、それほど目にする鳥ではありませんので、ひょっとして同一個体かなとも思いましたが、写真を見比べても判定は難しいですね。今季は観察例が比較的多かったようですし、別の個体と考えるのが妥当なところでしょう。ただ、ちょうど入れ替わりでしたし、誕生日に見つけたこととあわせて何か不思議な因縁を感じた次第です。

孔島のウチヤマセンニュウ

中井節二（熊野市）

和歌山県新宮市三輪崎の孔島に、私が最初に訪れたのは、今から20年位前です。ウチヤマシマセンニュウが繁殖していると聞いたからです。姿よりもチリリチュイチュイ鳴く声に、驚きました。聞いたことがない声なんです。1983年まで、シマセンニュウの亜種とされてきたウチヤマセンニュウは、旧ソ連の学者は、生態が異なっていることから別種とすることが望ましいといって1種として扱うようになりました。孔島の最大の天敵は人間だと思います。この島は小さな島でゆっくり回っても、5分位で回れます。島には小さな森になっていて、照葉樹林帯です。周りにはハマユウの群生地になっています。花期は、7～8月と繁殖時期と重なります。ハマユウを見に来る人もいます。島の中には縦横無尽に遊歩道があり、繁殖している所の脇に道があります。又4年ほど前から大きな問題ができました。それは猫を捨てにくることです。毎年5月

に駆除しています。平成16年の5月には4匹いました。至急新宮市に連絡をして、檻をすえましたが、なにぶん駆除する期限があり全部が駆除しているかわかりません。9月にも近くの鈴島で捨て猫が4匹捨てられていました。私がここにくるのは、遠浅の磯に来る、旅鳥のシギチで、南紀では一番多いところです。伊勢湾の干潟と比べると、非常にすくないですが、平成16年7月11日にはメリケンキアシシギが来ました。

平成13年に毎月1回の調査で、50種の野鳥を確認しました。シギチではシロチドリ、メダイチドリ、ムナグロ、ダイゼン、キョウジョシギ、キアシシギ、イソシギ、チュウシャクシギを見ました。平成13年の珍しい鳥は、ハジロカイツブリ、フクロウ、ノジコが来ました。中部以北には、珍しいクロサギは1年中見られます。孔島のアクセスは、新宮市から三輪崎まで車で10分位で行けます。三輪崎漁港の近くに無料の駐車場があります。そこから堤防沿いに徒歩でゆっくりと鳥を見ながら歩いても、15分位で着きます。途中鈴島があり、以前にはウチヤマセンニュウが繁殖していました。平成16年の繁殖調査では6番位いました。

ウチヤマセンニュウが、孔島で繁殖するには、まだまだ油断を許さない状況です。これからも見守っていかなければなりません。

嗚呼、ヒヨドリ

瀬田　聡美（久居市）

私は野鳥の中でヒヨドリが最も好きである。今年もまた彼らが多く見られる季節がやってきた。まあ、我が家の周りには一年中留まっているものも多いのだが。

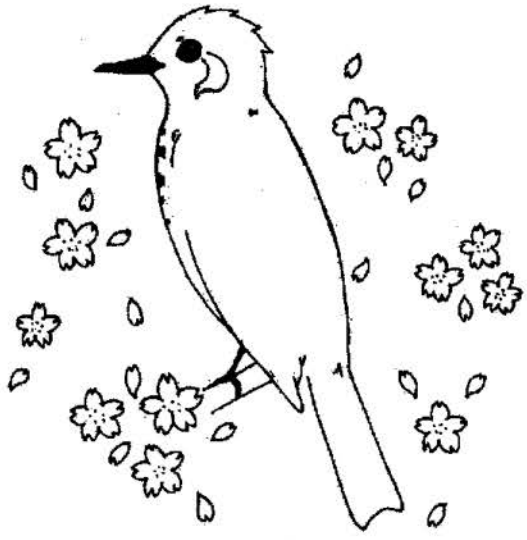
私がヒヨドリファンである理由は、彼らの行動にある。

まずは食事。彼らはとても綺麗に食事をする。私の妹の御飯であるドッグフードを無断で食す時も、けっして散らかさず、一粒一粒丁寧につまみ、飲み込み、横にある水で胃に流し込む。ミカンは食べ終えると必ず皮を餌台から外へ捨ててくれる。（実は少々迷惑なのだが・・・。）サクランボも一番美味しい時期につまんで行く。今年は器用にも、実の部分だけを電線の上で食べ、種を下に落としていった強者がいた。

そして、彼らの最大の魅力はその人間くささであろうか。冬の餌台にやって来て、他の鳥がいると「俺の縄張りで何しとる！」と言わんばかりに追い払ってしまう。が、その後ですぐに「さあ、席が空いたから食べにおいで。」と、語尾にハートマークでもつくような声でペアの片われを呼ぶのである。この差はいったい何なのであろう。

どうもヒヨドリは野鳥の会会員、特に冬に餌台を置く方からは嫌がられがちのように私には思える。納得できないことである。また、最近ムクドリがサクランボに興味を持ち始めたらしく、あの美食家（？）のヒヨドリが熟していない実をあせって食べてしまう、という驚くべき行動に出ている。

がんばれヒヨドリ、まけるなヒヨドリ。私は君たちが大好きだ！

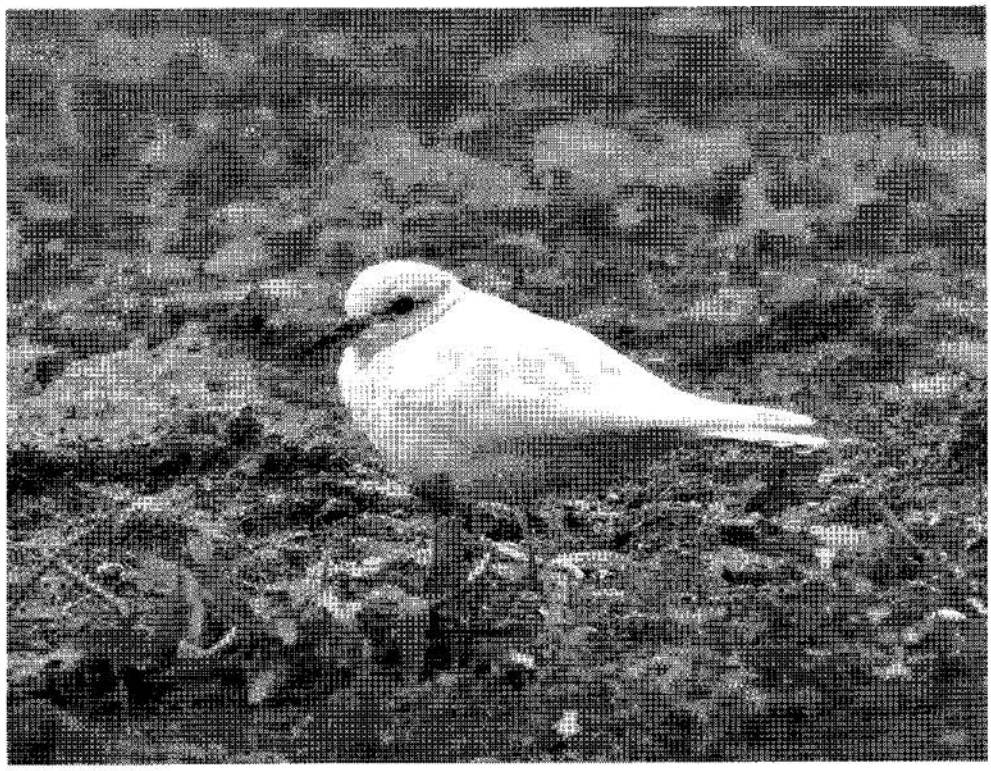


ヒヨドリには桜！
と思うのはワタシだけ…？

野鳥情報

研究部

種名	個体数	日時	場所(通称)	場所2	備考、メモ	報告者
ヘラシギ	1	2004/8/27	田中川河口干潟	河芸町	幼鳥	平井正志
キリアイ	4	2004/8/27	田中川河口干潟	河芸町		平井正志
キリアイ	1	2004/8/29	金剛川河口	松阪市	櫛田川河口周辺でよく観察された	前澤昭彦
キリアイ	1	2004/9/17	金剛川河口	松阪市		前澤昭彦
アカアシシギ	1	2004/9/4	田中川河口干潟	河芸町	次列風切の白を確認／ツルシギではない	平井正志
ミユビシギ	318	2004/9/4	田中川河口から町屋浦まで	河芸町と津市	今期最高数/町屋浦に256羽＋田中川河口付近に62	平井正志
アカエリヒレアシシギ	1	2004/9/19	田中川河口干潟	河芸町		平井正志
ヒバリシギ	5	2004/9/4	金剛川河口	松阪市		前澤昭彦
コチドリ（アルビノ個体）	1	2004/9/14	海蔵川左岸の休耕地	四日市市西坂部	海蔵川探鳥会で参加者全員が観察	尾畑玲子
クロツラヘラサギ	1	2004/9/26	鈴鹿川派川	楠町南五味塚	7月26日にも観察例あり	鹿島素子



コチドリ（アルビノ個体）
撮影： 横山真一

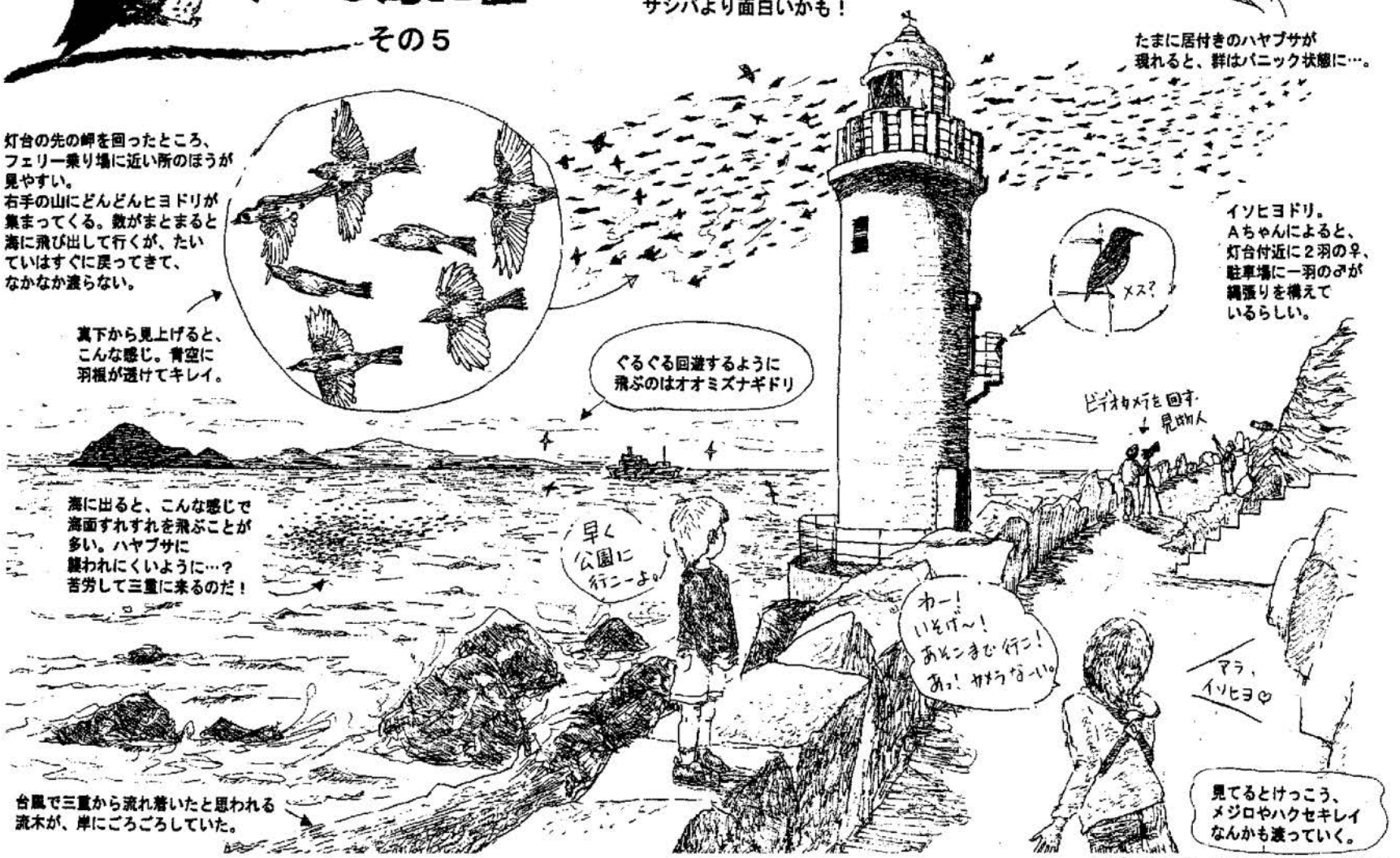
ふぁるこおばちゃんの 今日も鳥日和

その５

ヒヨドリだって、頑張っている！！

１０月７日（木）

Ｔ氏に便乗して勇んで伊良湖に行ってはみたけど、フェリーが着く頃には、サシバの渡りは一段落。そこで、恋路が浜遊歩道を歩き、伊良湖灯台方面へヒヨドリの渡りを見に行ってみました。おーーーー、スゴイ、次々に集結してはためらいつつ大海原へ飛び出していく雲霞のごときヒヨドリ！サシバより面白いかも！



小坂里香（度会郡度会町）

安濃ダムと横山池のカモ類

平井正志　(安芸郡安濃町)

安濃ダムと横山池は三重県中勢部芸濃町にあり、カモ類が多数飛来する。安濃ダムは安濃川の上流河内渓谷を水の中に沈めて作られた。最近は錫杖湖とも呼ばれている。かつての渓谷はみごとなものであったという。1985年にダムが完成し、水を蓄えだしたのは1986年からである。また横山池は江戸時代末期1866年（慶応２年）に作られたため池で、多くのカモ類が見られる。この2ヶ所は継続的にカモ類の調査をしているので、ここでまとめて報告する。

図１と表１に毎年１月15日に行ってきたガンカモ調査の結果を示す。ただし、2001年以降は休日のシステムが変化したので、15日とはかぎらず、8日から19日の間で任意の日に調査した。

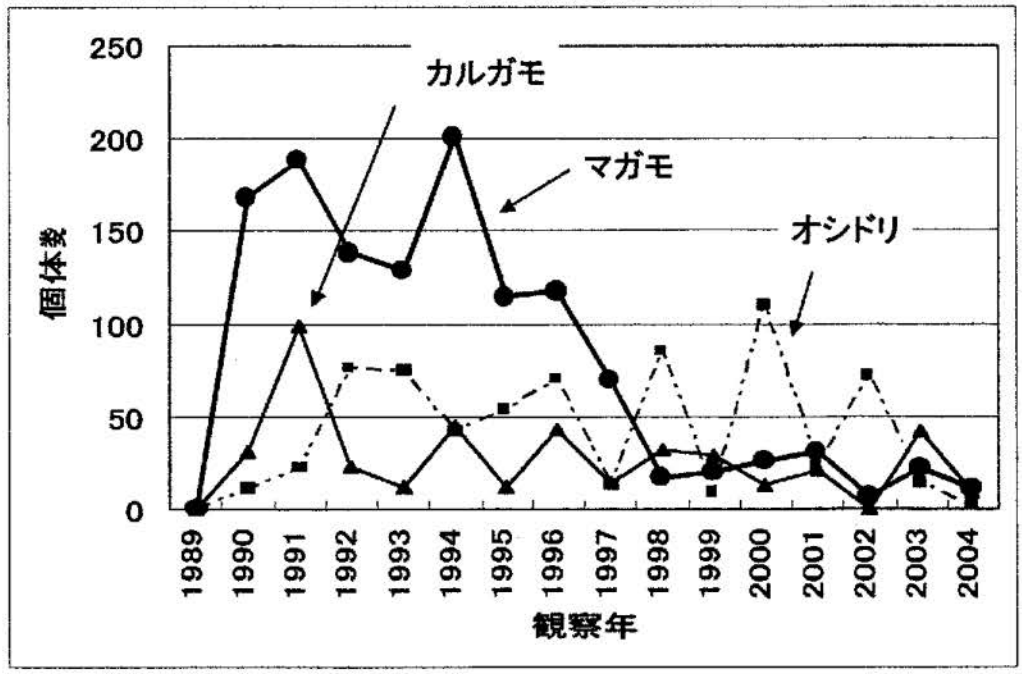
安濃ダム

図のように観察初年、1989年にはガンカモ類はまったく見られなかった。翌年以降見られるようになった。1997年まではマガモが非常に多く見られた。しかし、その数はしだいに減少し、現在ではわずかになった。一方オシドリは毎年飛来した。しかし、その数はかなり変動があった。オシドリの群が居場所を変えるのではないかと、安濃ダム周辺の池を調べたが、横山池はもとより、オシドリが多数飛来する場所は近辺にはなかった。12月23日に毎年探鳥会を開いているが、安濃ダムのオシドリの記録数はこの頃が最も多く、年が明けると減少する傾向にある。最近は年による飛来数の変動が激しい。2003年からは飛来数が極端に少なくなっていて、かつてのように翼を輝かせて日の当たる湖面を飛ぶオシ

表１：安濃ダムのカモ類の変化

調査日	オシドリ	マガモ	カルガモ	ヨシガモ	トモエガモ	合計
1989/1/15	0	0	0			0
1990/1/15	11	168	31			210
1991/1/15	22	188	99			309
1992/1/15	76	138	23			237
1993/1/15	75	128	12			215
1994/1/15	42	201	45	1		289
1995/1/15	54	115	12			181
1996/1/15	70	118	43			231
1997/1/15	13	70	14		1	98
1998/1/15	85	17	32			134
1999/1/15	9	20	29			58
2000/1/15	110	26	13			149
2001/1/14	23	31	21			75
2002/1/14	72	7	0			79
2003/1/8	14	22	42			78
2004/1/19	1	11	9			21

図１：安濃ダムのカモ類の変化



ドリの大群を見ることはできなくなっている。

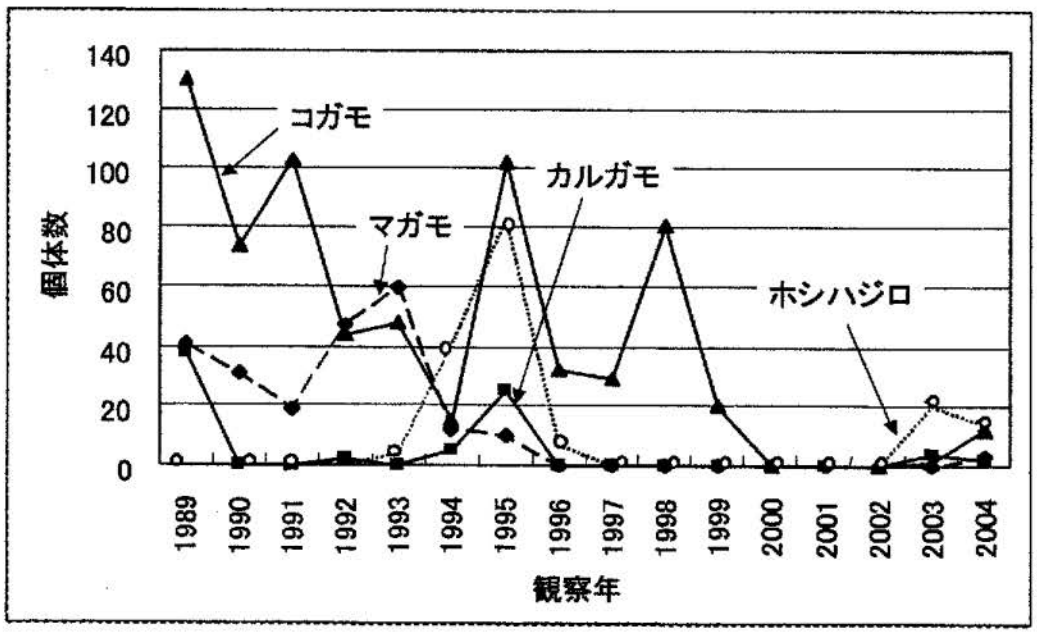
ダムが完成してから、すぐ周囲の公園化が始まった、右岸を中心に水際の木が切り倒され、道路や駐車場から湖面や水際が丸見えになった。またオオルリのさえずっていた小高い丘は丸裸にされ、遊具を置いた公園になった。オシドリは非常に神経質なカモであり、休息場所として周囲から見えにくい水際が必要である。その数が減っている一因はこの公園化であろう。

横山池は平地に３方向を堰堤で区切って作られたため池で以前は西側に人が入ることのできないなだらかな水際があり、カモ類やカワウが岸辺で落ち着いて休むことができた。以前はマガモやコガモ、カルガモなど淡水カモのみであったが、1993年以降はホシハジロやキンクロハジロが目立つようになり、またハシビロガモやオカヨシガモも見られるようになった。また一時期ミコアイサやカワアイサも少数飛来したが、その後姿を消している。マガモは徐々に減少し、1995年以降はマガモが見られなくなった。この傾向は安濃ダムと同じである。その後1997年から2001年にかけて水を抜いて、大規模な改修工事が行われ

表２：横山池のカモ類の変化

調査日	マガモ	カルガモ	コガモ	オカヨシガモ	ハシビロガモ	キンクロハジロ	ホシハジロ	ミコアイサ	カワアイ	合計
1989/1/15	41	38	130	0	0	0	0	0	0	209
1990/1/15	31	0	74	0	0	0	0	0	0	105
1991/1/15	19	0	103	0	0	0	0	0	0	122
1992/1/15	47	2	44	0	0	0	0	0	2	95
1993/1/15	60	0	48	0	2	18	4	2	0	134
1994/1/15	12	5	15	0	0	0	41	0	0	73
1995/1/15	10	25	102	16	13	0	83	2	0	251
1996/1/15	0	0	32	0	0	0	7	1	0	40
1997/1/15	0	0	29	0	0	0	0	0	0	29
1998/1/15	0	0	81	0	0	0	0	0	0	81
1999/1/15	0	0	20	0	0	0	0	0	0	20
2000/1/15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2001/1/14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2002/1/14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2003/1/8	0	4	1	0	0	23	20	0	0	48
2004/1/19	3	2	12	20	1	1	14	0	0	53

図２：横山池のカモ類の変化



た。工事によりカモの飛来は大幅に減少した。工事後2003年以降は再び水を貯めるようになったが、工事で西側のなだらかな水際はなくなり、西側に道路が作られたが、幸いこの道路はあまり利用されていない。工事後カモが観察されるようになったが、かつてのような100羽を超えるほどにはなっていない。工事終了以降もホシハジロやオカヨシガモが比較的多いが、今後変化することもあろう。これまでの16年間の調査で、横山池では普通種であるはずのヒドリガモ、オナガガモは一羽も観察されていない。芸濃町や安濃町の他のため池でも極めて稀である。カモ類の飛来は前年に飛来した場所を選ぶ傾向がかなり強く、変化はきわめて緩慢なようである。

支部活動の記録

事務局まとめ

●支部活動の記録（2004年8月～11月）

8/14　木曽岬干拓地問題　県と話し合い（保護部）
8/31　県指定鈴鹿鳥獣保護区の設定に係る公聴会
9/9　松名瀬堤防工事（国交省）についての地元意見交換会
9/10　支部報しろちどり第44号発行・発送作業
9/12　津地区交流会
9/11～12　中部ブロック会議へ支部長・副支部長の2名が参加
9/18　「木曽岬干拓フォーラム」打ち合わせ（北勢地区）
9/24　密猟シンポ開催にあたり県警へ挨拶（事務局）
9/29　吉崎海岸遊歩道整備計画について検討会
10/15　風力発電計画問題で
　　環境省志摩事務所を訪問
10/31　第2回理事会開催
11/3　編集会議
11/5　本部が木曽岬干拓地を視察
11/6　しぜん文化祭へ出展

●これからの予定（11月～　）

11/15　狩猟解禁のためパトロール
11/28　木曽岬干拓フォーラム開催
12/11～12　第12回全国野鳥密猟問題
　　シンポジウム開催
2005/1　　ガン・カモ調査

クズ

お知らせ

☆ 狩猟が始まりました！

狩猟期間中（11月15日～2005年2月15日）野外活動されるときは、周辺の状況に十分ご注意ください。（猟犬と出会うことによる事故のおそれもあります。）

☆ マナーを守ってください！

一部のバードウオッチャーのマナー低下で、農林漁業関係者から苦情を聞いています。探鳥する場合は、野鳥を脅かさないように行動するとともに、以下の事項を必ず守ってください。

・ 田畑など私有地に入らない。

・ 繁忙期を避け、通行の妨げにならないように。(反対駐停車をしない。)
・ 農林漁業者に出会ったら、挨拶を心がけて。

杉浦支部長による野鳥講座（２回）が開催されました。

○第１回　８月２２日（日）三重県総合文化センター　２１名参加

室内での講座でしたが、まずは参加者が少人数に分かれ「鳥とはどういうものか」を考えました。各グループでまとめたことについてそれぞれの代表者が発表しました。

杉浦支部長は「なぜ、鳥は止まり木からおちないか？」などの質問を参加者に投げかけながら、鳥のからだの構造について詳しく説明し「鳥の特徴」をお話されました。

また、くちばしの形など体の特徴によりエサや採餌の仕方が違うことから、参加者たちは実際にソヨゴなどの数種の蜜を味わったり、カイツブリの足の標本を観察したりと五感を使っての講義を熱心に受けていました。

○第２回　９月５日（日）津市偕楽公園　１２名参加

朝方、雨が降っていたので開催が危ぶまれましたが、序序に天候が回復し開催することができました。鳥類調査の基本であるラインセンサス法を学ぶまえに、私たちの身体の様々な部位がものさし代わりになることを教わりました。

ラインセンサス法とは、きめられたコースを一定の速さで歩き、左右２５ｍづつの範囲で確認された鳥の種名と個体数を記録する調査。ふつう人は１時間４ｋの速さで歩くそうですが、調査では１時間１．５ｋが標準ということで参加者たちは歩く速さを体感し、記録のとりかたを学びました。

2回を通して参加された瀬田孝子さんは、「野鳥だけでなく環境も知ることができた。実際にそった講義で面白く役に立った。また、このような講座に参加したい。」との感想を話していました。

（報告：西村）

2005（平成17）年度ガンカモ調査について

研究部

2005年も2004年度と同様に県の委託調査の一つとしてガンカモ一斉調査を実施する予定でいます。調査員と調査地点は基本的には2004年度の調査と同様でお願いしたいと考えています。調査員の方は下記の点にご留意頂き、変更の希望などがありましたら早めに連絡をしてください。調査関係資料の発送は12月25日頃を予定しています。

ご留意頂く点

1，2005年度の調査が実施できない場合
2，これまでの調査地点を変更したい場合
3，新規に調査地点に追加すべき地点がある場合（この調査は生物多様性国家戦略の国の事業です。既存の調査地点は県のコンピューターに登録されていて、急に変更できません。調査地点が増えれば、契約条件を変更する必要が出てきます。）
4，その他

連絡先　519-1414　三重県伊賀市御代673番地　前澤　昭彦　　電話0595-45-3713
20-1006（勤務地17時30分以降で）ファックス　45-3791
E-mail:lovebirdlovebird@hotmail.com

探鳥会報告　2004年6月～10月

● 海蔵川探鳥会

2004年6月1日（火）　9:40-12:00

四日市市西坂部町

尾畑玲子　参加者5名（内会員2名会員外3名）

カイツブリ(3)、カワウ(1)、ゴイサギ(1)、アマサギ(4)、ダイサギ(1)、チュウサギ(1)、コサギ(1)、カルガモ(11)、キジ(2)、コチドリ(1)、キジバト(5)、カワセミ(4)、ヒバリ(1)、ツバメ(4)、セグロセキレイ(1)、ヒヨドリ(2)、モズ(1)、ホオジロ(4)、カワラヒワ(4)、スズメ(5+)、ムクドリ(2+)、ハシブトガラス(2)、ドバト(4)　23種

従来のコースより少し足をのばした。サギ類が5種そろったことが、この場所の環境を物語ってくれる。ただ代官橋工事の影響か、鳥の数は少ないように思う。すべての工事が終わって、何がどこまで回復するかを見ていくのも面白そう。今年はセッカがいない。ここだけのこと？

● 五十鈴川定例探鳥会①

2004年6月3日（木）　9:00-11:30

伊勢市今在家町・五十鈴川周辺

加島隆子・林　淳子　参加者7名（内会員6名　会員外1名）

カワウ、ハヤブサ(SP)、キジバト、ホトトギス、カワセミ、コゲラ、ツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス、ウグイス、オオルリ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、カワラヒワ、スズメ、カケス、ハシブトガラス　21種

6月は雨になるだろうと思っていましたが、とても過ごしやすい探鳥会日よりでした。ホトトギスが5月24日頃から鳴いていましたが、今日も集合場所で聞くことが出来、又エナガやツバメの子づれの群れにも出会えました。

● 曽爾高原の野鳥観察

2004年6月13日（日）　9:00-13:00

奈良県曽爾村　曽爾高原

田中豊成・小林達也　参加者7名（内会員6名　会員外1名）

キジ、ツツドリ、ヒバリ、ツバメ、キセキレイ、ヒヨドリ、クロツグミ、ウグイス、セッカ、コサメビタキ、シジュウカラ、ホオジロ、ホオアカ、ハシブトガラス

14種

鳥種は少なかったが、天候もよく、ホオアカ等をゆっくりと観察できた。

● 美杉探鳥会

（共催　三重大学演習林）

2004年6月19日（土）　16:30-19:30

一志郡美杉村川上

坂元伸治　参加者19名（内会員6名　会員外13名）

アオバト(1)、ホトトギス(2)、ヨタカ(1～2)、ヒヨドリ(5～10)、カワガラス(2)、メジロ(2～5)、カケス(7)、ハシブトガラス(5)　8種

いつも梅雨時なので雨の心配があるが6月から5月中への開催にシフトした方が良いかもしれない。来年に向けて調査をする。

● 木曽岬干拓地探鳥会

（共催　愛知県野鳥保護連絡協議会）

2004年6月27日（日）

三重県木曽岬干拓地／愛知県鍋田干拓地

近藤義孝・村田芳雄　参加者20名

カワウ(30)、ゴイサギ(1)、ササゴイ(1)、アマサギ(7)、ダイサギ(3)、チュウサギ(1)、コサギ(3)、アオサギ(5)、カルガモ(15)、オカヨシガモ(1)、ミサゴ(2)、チュウヒ(3)、キジ(10)、タマシギ(1)、コチドリ(5)、ケリ(20)、コアジサシ(1)、キジバト(10)、ヒバリ(10)、ツバメ(100)、ハクセキレイ(1)、ヒヨドリ(2)、モズ(1)、オオヨシキリ(5)、セッカ(15)、カワラヒワ(2)、スズメ(50)、ムクドリ(60)、ハシボソガラス(120)、ハシブトガラス(30)、ドバト(13)

31種類

木曽岬の名物チュウヒも観察できた。今年も繁殖しているようだが、模型飛行機などによる妨害など問題が多い。

● 木曽岬干拓地探鳥会

（共催　愛知県野鳥保護連絡協議会）

2004年7月25日（日）

三重県木曽岬干拓地／愛知県鍋田干拓地

近藤義孝　村田芳雄　参加者14名

カイツブリ（2）、カワウ（40）、ゴイサギ（10）、ダイサギ（2）、コサギ（2）、アオサギ（10）、カルガモ（11）、オカヨシガモ（1）、キジ（3）、タマシギ（1）、コチドリ（2）、ケリ（20）、クサシギ（1）、イソシギ（4）、ツバメチドリ（1）、キジバト（10）、カワセミ（1）、ヒバリ（5）、ツバメ（1000）、ハクセキレイ（2）、オオヨシキリ（2）、セッカ（20）、カワラヒワ（7）、スズメ（50）、ムクドリ（5）、ハシボソガラス（100）、ハシブトガラス（50）、ドバト（100）　計28種

ツバメチドリが運良く観察できた。木曽岬・鍋田では、珍しく猛禽類が観察できなかった。暑さでチュウヒも日陰にいたのだろうか。

● 木曽岬干拓地探鳥会

(共催　愛知県野鳥保護連絡協議会)

2004年8月22日(日)

三重県木曽岬干拓地／愛知県鍋田干拓地

近藤義孝　村田芳雄　　参加者17名

カイツブリ（7）、カワウ（20）、ゴイサギ（15）、アマサギ（100）、ダイサギ（11）、チュウサギ（1）、コサギ（15）、アオサギ（20）、カルガモ（10）、コガモ（1）、オカヨシガモ（1）、ミサゴ（6）、トビ（1）、チュウヒ（2）、キジ（3）、コチドリ（10）、ケリ（50）、ウズラシギ（1）、クサシギ（4）、イソシギ（10）、ソリハシシギ（1）、キジバト（20）、カワセミ（1）、ヒバリ（3）、ショウドウツバメ（500）、ツバメ（500）、ハクセキレイ（2）、ヒヨドリ（2）、オオヨシキリ（5）、セッカ（20）、カワラヒワ（17）、スズメ（200）、ムクドリ（1）、ハシボソガラス（70）、ハシブトガラス（50）、ドバト（30）

計36種

オオヨシキリはまだ残っているけれど、ショウドウツバメは南へ飛び始めている。

● 高松海岸探鳥会

2004年8月29日〈日〉10:00-12:00

川越町高松・通称高松海岸

市川雄二・高　和義　　参加者4名(内会員4人)

カワウ（11）、ダイサギ（3）、コサギ（19）、アオサギ（2）、シロチドリ（38）、ムナグロ（1）、キアシシギ（1）、イソシギ（6）、ソリハシシギ（3）、ホウロクシギ（4）、チュウシャクシギ（2）、ユリカモメ（2）、ウミネコ（410）、コアジサシ（8）、ツバメ（8）、ハクセキレイ（4）、イソヒヨドリ（1♂）、ハシボソガラス（39）　　計18種

朝方の雨で探鳥会が危ぶまれましたが、10時開催時刻には4名の参加があり、いつものコースで予定通り行いました。傘をさしての探鳥会でしたが、18種類の野鳥が見られ、とりわけ渡りのシーズンの到来を告げるシギ・チドリ類の旅鳥が餌をあさる様子を見ることができ、満足しました。

北海道の洞爺湖にて。灰色のモをつまんだばかりに、「白鳥なのに優雅じゃない」と言われてしまったコブハクチョウ。ちなみに「遠目で見ててアヒルやと思っとった。」とも言われてた。

● 五主海岸探鳥会

2004年9月12日（日）9:30-11:30

一志郡三雲町五主

久住勝司　橋本富三　　参加者24名（内会員20人、会員外4人）

カワウ、チュウサギ、コサギ、アオサギ、ミサゴ、トビ、ダイゼン、キョウジョシギ、トウネン、ミユビシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、オオソリハシシギ、ホウロクシギ、チュウシャクシギ、ウミネコ、アジサシ、コアジサシ、ツバメ、ハシボソガラス　計20種

野鳥の出現数は少なかったが、奈良支部の方々、大阪から来られていた方々とも交流し、楽しく探鳥会を終えられたと思う。

● 海蔵川探鳥会

2004年9月14日（火）10:00-12:20

四日市市西坂部町

尾畑玲子　高　和義　　参加者6名(内会員5人、会員外1人)

カイツブリ（2）、カワウ（1）、ゴイサギ（若1）、ササゴイ（1）、アマサギ（29）、チュウサギ（5）、カルガモ（11）、バン（1）、コチドリ（7）、ケリ（1）、イソシギ（1）、キジバト（5）、カワセミ（2）、ヒバリ（3）、ツバメ（5）、ハクセキレイ（1）、セグロセキレイ（2）、ヒヨドリ（3）、モズ（1）、ホオジロ（5）、カワラヒワ（6）、スズメ（　）、ムクドリ（50＋）、ハシボソガラス（3）　計24種

コースの最後の見所（前日コチドリ15を確認していた)休耕田の水溜りに注目したらコチドリの白化個体（アルビノ）を発見。あまりにも目立つ白にこの先の多難がしのばれる。

● 多度山麓探鳥会

2004年9月25日（土）9:30-12:00

桑名郡多度町

加藤光広　藤田克三　　参加者6名(内会員5人、会員外1人)

アオサギ、ハチクマ、トビ、ノスリ、サシバ、キジバト、コゲラ、イワツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、コサメビタキ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、スズメ、ハシボソガラス　　計17種

サシバの渡りに一同感激した。

● 木曽岬干拓地探鳥会

(共催　愛知県野鳥保護連絡協議会)

2004年9月26日(日)

三重県木曽岬干拓地／愛知県鍋田干拓地

近藤義孝　村田芳雄　　参加者24名

カイツブリ（16）、カワウ（30）、ゴイサギ（40）、アマ

サギ(30)、ダイサギ(10)、チュウサギ(3)、コサギ(10)、アオサギ（5）、カルガモ（5）、コガモ（3）、オカヨシガモ（1）、ミサゴ（3）、トビ（1）、チュウヒ（1）、チョウゲンボウ（1）、キジ（10）、バン（1）、コチドリ（3）、ケリ（2）、アオアシシギ（5）、クサシギ（3）、イソシギ(5)、キジバト（15）、アマツバメ（3）、カワセミ（4）、ヒバリ（10）、ショウドウツバメ（500）、ツバメ（10）、ハクセキレイ（2）、ヒヨドリ（25）、モズ（4）、ノビタキ（1）、セッカ（3）、スズメ（100）、ムクドリ（30）、ハシボソガラス(50)、ハシブトガラス(50)、ドバト(35)

計38種

カモ類はほとんど来ていないけれど、チョウゲンボウが姿をみせてくれた。
冬に向けて、どんな猛禽類がやってきてくれるだろうか。三重、愛知両県は高速道路北側を埋め立てて開発しようとしている。来年も鳥たちがやってこられるように、頑張らないと。

● 飯高タカ渡り探鳥会

2004年10月2日（土）9:30-12:30

ホテルスメール付近

西村四郎　　中村洋子　　参加者17名（内会員16人、会員外1人）

カワウ、アオサギ、トビ、サシバ、クマタカ、キジバト、アオゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、イソヒヨドリ、スズメ、カケス、ハシブトガラス　　計17種

曇り空のため、タカ渡りは見られなかった。この日伊勢では数百羽飛んだと後で聞きました。途中で降りたのだろうか？ 飯高道の駅でイソヒヨドリ（オス），ホテルスメールではメスを見ました。山の中で会えるとは思いませんでした。

編集後記

2004年も、もう12月。今年も台風、猛暑、地震と、自然界の脅威にさらされた一年でした。それでも、秋の渡りに立ち寄ったシギ、チドリ達たちにも結構楽しませてもらい、今は冬の使者のカモ達が、この地にもどんどんと渡って来てくれています。支部報「しろちどり」は今年も特別企画を組み入れました。3月号「あこがれの鳥・あこがれの旅」、6月号「三重県の海岸」、9月号「三重県の川」、そして12月号は、「野鳥観察施設」です。いかがでしたか・・・。来年度も皆様のご協力(原稿集めが大変です)をいただいて、より一層の内容充実に力を注ぎたいと思っています。

● タカ渡り探鳥会

2004年10月3日（日）　雨天のため中止。

● 名張大屋戸探鳥会

2004年10月17日（日）9:00-12:00

名張市東町、大屋戸橋周辺

小林達也　　田中豊成　　参加者11名（内会員9人、会員外2人）

カイツブリ、カワウ、アオサギ、カルガモ、トビ、ハヤブサ、イソシギ、キジバト、アマツバメ、カワセミ、ショウドウツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、イソヒヨドリ、シジュウカラ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト　　計29種　渡り途中のツバメの仲間、愛嬌良しのノビタキも近くで観察できたが、市街地の池にいつもはいるカモの仲間、キジは両岸での工事のせいか見られなかった。

● 白塚・町屋海岸探鳥会

2004年10月24日（日）10:00-12:00

津市白塚・町屋海岸一帯

石原　宏　　大西幸枝　　参加者15名（内会員12人、会員外3人）

カワウ、ダイサギ、コサギ、シロチドリ、ハマシギ、ミユビシギ(240)、ユリカモメ、セグロカモメ、キジバト、ハクセキレイ、モズ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、ホオジロ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス　　計18種

当該海岸一帯は県内では、ミユビシギが群れで立ち寄る数少ない場所で、この日も幸い240羽ほどの群れがいた。

伊勢新聞社、竹内典子記者の取材有り。

しろちどり　45号
2004年12月1日発行
題字：　濱田　稔
表紙絵：　鹿島素子
カット：　平井正志・瀬田聡美
編集：平井正志　〒514-2325
安芸郡安濃町田端上野910-49
発行所：日本野鳥の会三重県支部
杉浦邦彦方
〒516-0026　伊勢市宇治浦田2丁目9-4
印刷：伊藤印刷株式会社
〒514-0027　津市大門32-13